

第九部 わざわいの書

(原題：ヒゼキヤ王治世第 14 年の危機に瀕しての宣告)

イザヤ 28 章～35 章

□第九部のアウトライン

		わざわいだ
A) アリエルの苦難	28～29 章	28 : 1、29 : 1、29 : 15
B) エジプトとの同盟に対する警告	30～31 章	30 : 1、31 : 1
C) 正義の王による統治	32 章	
D) イスラエルの避難	33 章	33 : 1
E) 諸国民に対する神の怒り	34 章	
F) イスラエルの回復	35 章	

□「 A) アリエルの苦難 」のアウトライン (イザヤ 28～29 章)

資料ページ

1. わざわいだ、エフライムの誇りと飲酒 (28 : 1～6) 71
2. 南ユダも同じ問題に (28 : 7～13) 72
3. 死とよみの契約 (28 : 14～22) 73
4. 二つのたとえ話 (28 : 23～29) 75
5. わざわいだ、アリエルよ。おまえが倒れる (29 : 1～4) 77
6. アリエルの敵も処罰される (29 : 5～8) 77
7. イスラエルの指導者たちの盲目ぶり (29 : 9～12) 78
8. イスラエルの民の偽善 (29 : 13～16) 79
9. イスラエルの民族的救い (29 : 17～24) 80

5. わざわいだ、アリエルよ。おまえが倒れる (29 : 1～4)

(1) 1 節 「ああ (わざわいだ)、アリエル、アリエル。ダビデが陣を敷いた都よ。年に年を加え、祭りを巡り来させよ。

- ヘブル語の「アリエル」とは、二つの意味がある。ひとつは「神のライオン」、もうひとつは「神の祭壇の炉」。
- 創世記 49 : 9 「ユダは獅子の子」とあるように、「神のライオン」はユダ族、特にダビデ王を指す。そして「ダビデが陣を敷いた都」であるエルサレムを指す。ダビデが陣を敷いてシオンの要害を占領し、そこにダビデの町とも呼ばれた都エルサレムを建てたからである。

(2) 2～4 節 わたしはアリエルを虐げるので、そこにはうめきと嘆きが起こり、わたしにとっては祭壇の炉のようになる。わたしは、あなたの周りに陣を敷き、前哨部隊で囲み、あなたに対して壘を築く。あなたは低くされ、地の中から語りかけ、あなたのことばは、ちりの中からつぶやく。あなたの声は、死人の霊のように地の中から出て、あなたのことばは、ちりの中からささやく。

- 「アリエル」のもう一つの意味、「神の祭壇の炉」という意味では、エルサレムが大患難期に攻撃を受けて火で焼かれることを示す。
- この箇所の内容は、他の預言とも合わせると、大患難期末期のハルマゲドンの戦いにおいて、反キリストと彼に従う諸国の軍勢がエルサレムを攻撃することを指す。

6. アリエルの敵も処罰される (29 : 5～8)

5～8 節 しかし、敵の群れは細かいほこりのようになり、横暴な者の群れは吹き飛ぶ籾殻のようになる。しかも、それは突然、不意に起こる。万軍の主はあなたを訪れる。雷と地震と大きな音をもって、つむじ風と暴風と焼き尽くす火の炎をもって。アリエルに戦いを挑むすべての民の群れ、これを攻めて、取り囲み、これを虐げる者たちはみな、夢のようになり、夜の幻のようになる。飢えた者が夢の中で食べ、目が覚めると、その飢えは満たされず、渴いている者が夢の中で飲み、目が覚めると、実に疲れて喉が渴いているように、シオンの山に戦いを挑むすべての民の群れもこのようになる。

- 「敵の群れ」、「横暴な者の群れ」、「アリエルに戦いを挑むすべての民の群れ」とは、他の預言とも合わせると、反キリストと彼に従う諸国の軍勢である。

- 大患難期の末期、ハルマゲドンの戦いにおいて、反キリスト軍はエルサレムを攻撃したあとボツラに向かう。反キリスト軍がボツラに避難しているイスラエルの民に迫る中、ボツラにメシアが再臨する。メシアは反キリストを殺し、諸国の軍勢をエルサレムまで押し戻して、一日で彼らを壊滅させる。

7. イスラエルの指導者たちの盲目ぶり (29 : 9～12)

- (1) 9～10 節 驚き、たじろげ。目を閉ざされて、盲目となれ。彼らは酔うが、ぶどう酒のせいではない。ふらつくが、強い酒のせいではない。主はあなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、預言者というあなたがたの目を閉ざし、先見者というあなたがたの頭をおおわれた。

- イスラエルの指導者たち、特に預言者や先見者と呼ばれるユダヤ教の指導者たちは、偽預言者であり、彼らの霊的盲目が問題の根底にある。偽預言者たちは酔うが、ぶどう酒のせいではない。主が彼らの上に「深い眠りの霊」を注ぐからである。

- (2) 11～12 節 そのため、あなたがたにとっては、すべての幻が、封じられた書物のことばのようになった。読み書きのできる人に渡して、「どうか、これを読んでください」と言っても、「それは封じられているから読めない」と言い、また、読み書きのできない人にその書物を渡して、「どうか、これを読んでください」と言っても、「私は読み書きができない」と答えるであろう。

- 聖書に記された幻について、指導者たちの誰も解説することができない。解説どころか、自分で読んで理解することすらできない。

8. イスラエルの民の偽善 (29 : 13~16)

- (1) 13 節 主は言われた。「それは、この民が口先でわたしに近づき、唇でわたしを敬いながら、その心がわたしから遠く離れているからだ。彼らがわたしを恐れるのは、人間の命令を教え込まれてのことである。

- 口先では神を敬うと言いながら、聖書に記された神のことばを理解できないがゆえに、民の心は神から「遠く離れている」。そして民が神を恐れるのは、「人間の命令を教え込まれてのこと」である。この人間の命令とは、**ユダヤ教の口伝律法**であるが、それはイザヤの時代には、まだ存在しない。
- 口伝律法は、旧約聖書には全く登場しない。旧約聖書の最後の巻、マラキの預言書は、紀元前 440 年頃。このあと、イエスの公生涯のときまでに、ユダヤ教の伝統の中で徐々に形成されていった。

⇒ マタイ 15 : 1~9 パリサイ人や律法学者とのイエスのやり取り

- (2) 14 節 それゆえ、見よ、わたしはこの民に再び、不思議なこと、驚くべきことをする。この民の知恵ある者の知恵は滅び、悟りある者の悟りは隠される。」

- 大患難期において、神はイスラエルの民に向けて「再び、不思議なこと、驚くべきことをする。」その目的は、「知恵ある者の知恵を滅ぼす」ことである。大患難期においてイスラエルの民は主の驚くべき奇跡を見て、ユダヤ教の口伝律法を捨てる日が来る。

- (3) 15~16 節 わざわいだ。主に自分のはかりごとを深く隠す者たち。彼らは闇の中で事を行い、そして言う。「だれが私たちを見ているだろう。だれが私たちを知っているだろう」と。ああ、あなたがたは物を逆さに考えている。陶器師を粘土と同じに見なしてよいだろうか。造られた者がそれを造った者に「彼は私を造らなかった」と言い、陶器が陶器師に「彼にはわきまえない」と言えるだろうか。

- 「わざわいだ」・・・将来のイスラエルの指導者たちに対して
- 彼らの考えが誤っていることが明らかになる日が来る。「陶器師と粘土(陶器)」の関係。イスラエルは神が造り、育てた民である。イスラエルは、「神は自分たちを造らなかった」とか、「神にはわきまえない」とか、言えない。

9. イスラエルの民族的救い (29 : 17～24)

イスラエルが民族的救いを受けるためには、自分たちイスラエル民族と神との関係を正しく理解することが必要である。

具体的には、口伝律法ではなく、聖書そのものを読んで理解し、神のみこころ、特にイスラエル民族に対する神の愛を受け取ること、そして、イエスを聖書が預言していたメシアであると認めることである。

(1) 17 節 もうしばらくすれば、確かに、レバノン^①は果樹園に変わり、果樹園は森に見えるようになる。

- 大患難期が終わり、メシアの王国になると、レバノンですら、実り豊かな果樹園が広がり、まるで森のように見えるほどである。まして、イスラエルの地は豊かな地となる。

(2) 18 節 その日、耳の聞こえない人が、書物のことばを聞き、目の見えない人の目が、暗黒と闇から物を見る。

- 「その日」、メシアの王国においては、イスラエルの民の中にはもはや、霊的に耳の聞こえない人、霊的に目が見えない人はいなくなる。皆が、「暗黒と闇」、すなわちユダヤ教の口伝律法から脱却して、霊的に見えるようになり、「書物のことば」、すなわち聖書に書かれた神のことばを聞くことができるようになる。

(3) 19 節 柔和な者は主によってますます喜び、貧しい者はイスラエルの聖なる方によって楽しむ。

- 「柔和な者」、「貧しい者」とは、レムナント（イスラエルの残れる者、真の信仰者たち）である。ここでは特に大患難期のレムナントを指す。彼らは、メシアの王国において、「主によってますます喜び、イスラエルの聖なる方によって楽しむ」

(4) 20～21 節 横暴な者はいなくなり、嘲る者は絶え果て、よこしまなことを企む者はみな絶ち滅ぼされるからだ。彼らはことばで他人を罪に陥れ、城門で戒めを与える者に罾を仕掛け、正しい人を、理由もなく押しのける。

- メシアの王国がスタートするときに、大患難期を生き延びた人が全員そのまま、メシアの王国に入れるわけではない。「横暴な者」、「嘲る者」、「よこしまなことを企む者」、といった人々、すなわち不信者たちは入ることができない。彼らは、「いなくなり」、「絶え果て」、「絶ち滅

ばされる」。

- これは、大患難期とメシアの王国との間の 75 日間における出来事のひとつ、諸国民のさばき（マタイ 25：31～46）による。このさばきが「諸国民の」と呼ばれるのは、イスラエル民族はメシアの再臨のときに民族的救い、すなわち全員が救いを受けていて、一人もこのさばきを受ける必要がないからである。

(5) 22 節 それゆえ、アブラハムを贖い出された主は、ヤコブの家についてこう言われる。「今からヤコブは恥を見ることがなく、今から顔が青ざめることはない。

- イスラエル民族が民族的救いを受ける基盤は、アブラハム契約である。
「アブラハムを贖い出された」主が、「ヤコブの家」、すなわちアブラハムの子孫であるイスラエル民族を贖ってくださるのである。
- アブラハム契約・・・土地の約束、子孫の約束、祝福の約束
- 贖い出す・・・代価を払って奴隷や捕虜を買い戻して、自由にする

(6) 23 節 彼が自分の子らを見て、自分たちの中にわたしの手のわざを見ると、彼らはわたしの名を聖とし、ヤコブの聖なる者を聖として、イスラエルの神を恐れるからだ。

- 「ヤコブの聖なる者」とは、主。アブラハム・イサク・ヤコブの子孫であるイスラエル民族の人々が、自分たちの中で起きた主の奇跡を見て、主をほめたたえ、主を恐れ敬う。

(7) 24 節 心迷う者は理解を得、不平を言う者も教訓を得る。」

- 「心迷う者」、「不平を言う者」とは、イスラエル民族の現状そのものである。現在は霊的に盲目の彼らが、完全に聖書を理解し、教えを受け取る日が来る。